104

2014 SPRING

美術館NEWS

館長コラム

余滴より―フジタとクラスメート

鍵岡正謹

レオナール・フジタとなる藤田嗣治は、近代世界美術史とやらがあるなら日本人画家として大文字で書かれる筆頭だろう。グラン・フォン・ブラン「素晴らしい白地」と絶賛された裸婦の乳白色の肌はパリを魅了し、エコール・ド・パリの寵児となった。その創造の秘法はシルバー・ホワイトやジンク・ホワイトにタルクが加えられているという。タルクという難しそうな成分はベビー・パウダーだというから面白い。▼乳白色の絵肌マチエールに墨と面相筆で描かれる繊細で艶のある線に、人物や静物・猫たちが生きる。藤田が渡仏して100年を記念した「レオナール・フジタとパリ 1913-1931」展はその創造までの軌跡をたどる。▼藤田の東京美術学校（現・東京藝術大学）の西洋画科クラスメートは、錚々たるメンバーである。美校に残り教授となる田辺至は哲学者元（はじめ）の弟、山脇信徳は画学生のとき“日本のモネ”と呼ばれた。九里四郎は白樺派画人、田中良は舞台美術家となる。池部鈞（ひとし）・近藤浩一路・岡本一平は新聞挿絵や漫画の開拓者で、岡本はその道で知られる太郎の父、池部は生活臭ある油彩家となり俳優良の父、近藤は近代水墨画家となった。▼長谷川昇は油彩の歌舞伎役者絵で知られ、安宅安五郎は創元社創立者。望月桂は民衆美術運動の先駆者で再評価されている。香田勝太・新井完らもいる彼ら画学生は、ボヘミアン振りを大いに発散させた多趣味な才人で、大正自由人となった。▼彼らのなかに津山出身の大谷浩がいる。子規の友人大谷是空の養子となり、中外商業新聞（現・日本経済新聞）に勤めた俳人碧雲居（へきうんきょ）は、画学生の頃から文芸サークルを組み俳句をひねった。〈鰯雲太陽に肩たゝかれし 碧雲居〉

「美術館の紹介」vol.4

エントランスを抜けて、地下への階段を下る手前で彫刻作品に出会う。
複数の素材が絡み合う様子は、多様な展示によって姿を変える「岡山県立美術館」そのものを象徴すると共に、来館者を誘導する役目も担っている。

岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814　岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800　FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/

交通案内　JR岡山駅東口から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間　9:00―17:00（入館は16:30まで）
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日　月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

大山真季

美術館ニュース104号をお届けします。関東で47年ぶりとなる大雪が降った2月は、ここ岡山市内でも20年ぶりの積雪がありました。街のあちこちに雪だるまが作られ、白く覆われた木々たちは山水画のような静寂な美しさを漂わせていました。春らしい暖かさを迎えるまでにはもうしばらくかかりそうな今日この頃ですが、新年度に開催される展覧会へ向けて、館内では慌ただしく準備が進んでいます。6月以降のスケジュールについては、当館ウェブサイトにて年間の展覧会スケジュールを公開していますのでそちらもあわせてチェックしてみてください。

ISSN 0916-9466
美術館NEWS 第104号　発行｜2014年3月

岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

「調査ノート」をめぐって

中田利枝子（学芸課長）

①《地蔵菩薩》元禄15（1702）年 般若院

①《地蔵菩薩台座裏墨書》元禄15（1702）年 般若院

年当初に館ニュースこの欄に「研究ノート」のお題で割り付けをもらってから、年度終わりの号でもあるし、一年の間にはいくらかネタも出来るだろう、くらいに思っていたが、一年は慌ただしく過ぎ「研究」に至るどころではなかったというのが正直なところ。昼中パソコンに向かっていると、とにかく目が疲れ、夜まで気力が続かない。今年度は春に開催した「美作の美術」展、秋に開催した「極楽へのいざない～練り供養をめぐる美術」展と仏教美術の優品を公開する機会にも恵まれ、多くの社寺にご挨拶にうかがったが、そこでは公開作品以外の多彩な作品に出会うことがあった。また、県立美術館という職場がら、保存方法についての意見を求められることもあり、その際拝見した作品について、いずれ研究の題材や展覧会の出品にもなるだろうと記録を取ってきた。しかしノートには走り書きのメモが山積するばかりで、それを研究するどころか、データ入力、整理もままならなかったのが情けない。
ここでは、走り書きメモから、今年印象に残ったいくつかを紹介しておこう。

①　般若院の地蔵菩薩坐像

平成22年に開催した「岡山美の回廊」に本尊阿弥陀如来立像をご出品いただいた御縁で、小さな地蔵菩薩坐像の保存について相談を受けた。各部材は膠接着であったため、数百年をへて接着力は失われ、ばらばらになった状態であった。像と台座の底には各々墨書があり、元禄15年（1702）蓑輪幸慶吉定という仏師の作であることが判明した。部材の現存を確認したところ一部は既に欠失していたが、これ以上の散逸を防ぐために、可能な限り膠による仮接着を行った。仏師については今のところ不明であるが、元禄というと寺院の再興が盛んであった時期であり、同じ仏師名が出てくるのではないか、と期待している。なお像底の銘文は一部が削り取られ、そこに寛保3年（1743）の修理銘が記されている。

②　金峯寺の不動明王立像

今年度秋に倉敷市立美術館で開催した「倉敷市仏教寺院の至宝」展の事前調査の一部に同行させていただいた御縁で、この像の発見から修理までに立ち会わせていただくことになった。細身で、着衣は薄く表現されている。両目は正面に見開かれ、上の歯は下唇を噛み、牙は左右とも下に伸びている。10世紀ころから「不動十九観」に基づいて造像された不動明王は、右眼で天、左眼で地を睨み（天地眼）、右の牙を上方、左の牙を下方に出す（利牙上下出相）恐ろしい表情で、その後この姿が主流をしめるようになるが、金峯寺の像は古い姿を受け継いだ穏やかなものである。不動明王は護摩堂など煙脂にさらされる場所に祀られることが多いため全身が真っ黒であった。脇の下あたりには青い彩色がわずかに確認できたが、鼻先や両足は江戸時代ころに補修されたと見られ、青色も造像時には遡れないと推測された。倉敷市立美術館での出品を前に修復が行われた。持物や辮髪の先端、耳朶など失われていた部分が補われ、彩色が鱗の様に浮き剝がれかけていた全身は素地仕上げとなった。今まで注目されることがなかったのが不思議なくらい、愛らしく穏やかな平安時代の不動明王がよみがえった。

③　萬福寺の肖像坐像

津山市の西北、黒沢山山頂の真言宗寺院萬福寺へ岡山県立博物館学芸員W氏とともに訪れた際、お祀りされていない由来不明の肖像彫刻を拝見した。殺菌燻蒸のため博物館に運ばれ、胎内墨書銘がある、との情報がW氏より寄せられた。「大宮方大仏師法橋院朝　吉野氏　□□（花押）」と確認できた。平安時代後期の院朝はあまりにも有名だが、作風は明らかに江戸時代。江戸時代の院朝とはだれか。しばらくそのままになっていたのだが、「極楽へのいざない」展の準備をしながらあれこれとノートをひっくり返しているうち、10年程前に調査させていただいた津山市清瀧寺の本尊千手観音立像の光背枘（台座に差し込む部分）に書かれた墨書「京都一条室町にて　定朝廿八代　法橋院朝　吉野氏」の記録がでてきた。10年前もよくわからないままになっていたのだ。2つの作品に同じ仏師名を見いだしたころ、『日蓮聖人と法華の至宝』第四巻彫刻（平成25年11月28日発行・同朋社）が届いた。いわゆる名品紹介に主眼をおいたものでなく、日蓮法華の彫刻とはいかなるものや、と興味をそそる内容であった。ここに京都妙顕寺所蔵の大覚妙実坐像が掲載され、体躯部分の作者が法橋院朝の作であることが紹介されていた。胎内文書に「皇都今出川通り辨財天町住人　洛陽大宮方大仏師法橋院朝　六十九才　奉造立」「正徳三年」（1713）とあるという。まだ全くの推測であるが、萬福寺の「僧綱襟に合掌姿」の御像は、岡山に多くの日蓮宗寺院開創伝承をもつ大覚妙実像の可能性もある。真言宗寺院内でお祀りされていないことにも納得がいく。だが、まだ点と点である。推測は果てしなく広がるが、もう少し資料が揃うまではこれくらいにしておいた方がよさそうだ。

将来、かなり先のことになるかも知れないが、あの作者とこの作者が結びつくこと、関連の資料が発見されること、貴重な情報が寄せられることを期待している。なにかの御縁があればこそ出会うことになった作品である。御縁を大切にして走り書きを整理し役立てていく努力が必要だと思っている。

②《不動明王立像》修復後 金峯寺

③《某上人座像》正徳3（1713）年 萬福寺

種をまく ―岡山県立岡山盲学校美術館鑑賞学習―

岡本裕子(主任学芸員)

岡山県立岡山盲学校（高等部）の美術館鑑賞学習は、今年で3回目を迎えます。晴眼者は、情報の83％を視覚からキャッチしているといわれます。しかし盲学校の生徒は、視覚以外の触覚、嗅覚、味覚、聴覚をより多く使って、情報をキャッチすることになります。情報をキャッチする時に使っている感覚器を、より意識することができるような「こと」と、キャッチした情報に自分の生活経験や学びの経験をさらに付加しながら、自分なりの感じ方や考え方を言葉で表現する「こと」ができれば、生徒は作品をみることができるのではないか、と考えています。そこで、生徒が美術館へ一歩足を踏み入れたときから、このような「こと」が起こるよう生徒の気づきを促し、その気づきに耳を傾け、丁寧に対話を積み重ねていくことを、今回は特に意識的に取り入れました。8人の生徒は、視覚障がいの程度が一人ひとり異なっていたので、自分の感じ方と他者の感じ方をすりあわせながら、視覚も含めた全ての感覚器を、自分なりにイメージしながら使うことが可能となったようです。この体験をもとに展示室で作品をみる活動へ繋げていきました。最初に、体験型の作品《デートマシーン》を8人全員で体験し、その後2～4人の小グループで、それぞれナビゲーター（美術館スタッフ）と一緒に作品を1点みました。今回の鑑賞学習の中でどのような「こと」が起こったかについては、生徒の感想を一部紹介したいと思います。

『美術館鑑賞で、特に私がおもしろいなと思ったのは《イイボク、ワルイボク》の作品でした。作者が（作品に）こめた気持ちやそのときの心境を考えれば考えるほどドキドキして、鑑賞した後も、作品に対する（自分なりの）共感や作者の気持ちをひもといたという満足感で心がいっぱいになり、同時におもしろい作品だという気持ちが生まれました。』（高等部2年生）

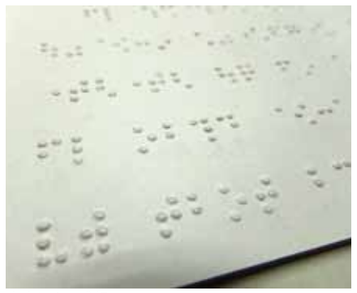
彼女は、この鑑賞学習の数日後、修学旅行で東京国立博物館に行き、盲学校のためのスクールプログラムに参加したそうです。

児童生徒が、美術館や作品と出会う瞬間を共有することを通して、学校団体観覧の対応は「種まき」に似ていると感じています。小さな種を一粒まく、その小さな種がどこかで一つ芽吹き花を咲かせ、そしてまた種となってどこかで新しく芽吹く。この種は、綿毛にのって飛んでいくタンポポの種に似ているかもしれません。最初の種まきはたった一粒ですが、その先にある可能性は大きく強いものであって欲しいと願っています。タンポポの綿毛にのって飛んでいく種は、とても生命力が強くアスファルトの裂け目から生えることもあるほどですから。

※≪デートマシーン≫≪イイボク、ワルイボク≫（岡山県立美術館特別展「中原浩大展 自己模倣」より）

特別展「中原浩大展 自己模倣」より
《デートマシン》鑑賞風景

特別展「中原浩大展 自己模倣」より
《イイボク、ワルイボク》鑑賞風景



点字による感想

雑感：シエナを訪れて

橋村直樹（学芸員）

ドゥッチオ《マエスタ》1308-10年 シエナ大聖堂付属美術館

シエナ市庁舎とカンポ広場

この祭壇画が大聖堂に運ばれた日には、店はみな表を閉ざし、司教は司祭と修道士とからなる大勢の信心深い一団を指揮して、厳かな行列を組んだ。この行列にはノーヴェの面々や、コムーネの役員全員、そして全市民が続き、要人たちは手に手に灯のともった蝋燭を持って絵の近くに場所をしめた。そして行列の後尾には、女たちと子供たちが信仰心にあふれんばかりについていった。そして人々は途中、慣例どおりに、カンポ広場をぐるりと回ってから、大聖堂までこの絵を送っていった。そのときには都市のすべての鐘が、かくも気高い絵に敬意をあらわして高らかに鳴り響いたのである*。

これはイタリア中部トスカーナ地方の古都シエナの年代記からの一節であるが、ここで語られる祭壇画とはシエナ派の祖として名高いドゥッチオによる14世紀初頭の《マエスタ（荘厳の聖母）》である。もともとはこの中央パネルのほか、多数の聖書場面と聖人像で構成されていて、縦横5mにおよぶモニュメンタルな大祭壇画であった。16世紀初頭までシエナ大聖堂の主祭壇に置かれていたが、現在は大聖堂付属美術館に収められ、中央パネルと聖書諸場面がばらばらに分けられて展示されている。

かつて学部生のころ13-14世紀のイタリア美術とビザンティン美術の影響関係について勉強していた私は、冒頭にあげた祭壇画運搬の記述を読み、深い印象をうけた。以来、ドゥッチオの《マエスタ》をいつかは実見したいと思い続けていたのであるが、昨秋、遅まきながらシエナを訪れ、ようやくその願いを叶えることができた。シエナに到着した私は、祭壇画を運んだ行列と同じように、まずはカンポ広場をぐるっと回り、当時と変わらぬ石畳の緩やかな坂道を大聖堂まで歩いて行った。そして大聖堂を訪れた後、隣接する付属美術館で念願の《マエスタ》と対面したのである。うす暗い展示室の中で、年代記の記述を思い返しながら、現実感がありつつも優美な聖母の顔をじっと見つめていると、これを篤く崇敬した当時のシエナ市民の心性に触れることができたような気がした。芸術体験がそのまま宗教的体験となったといえるが、おそらくこうした芸術と宗教が渾然一体となった体験を可能とするのが宗教美術の魅力の一つなのだろう。

ところでシエナには、先の大聖堂やカンポ広場のほかに、シモーネ・マルティーニやアンブロージョ・ロレンツェッティらの壁画がある市庁舎（パラッツォ・プッブリコ）、あるいはシエナ派の作品を通観することができる国立絵画館など見所が多数ある。私もそれらを訪れてシエナ派をじっくり堪能してきたのだが、岡山県立美術館の学芸員としては一つ大きな見落としをしていた。実はシエナは、岡山出身の洋画家・松岡壽がローマで師事したチェーザレ・マッカリ（1840-1919）の出身地であり、私がシエナ派による壁画ばかりに目を奪われていた市庁舎には、イタリア統一運動での出来事を主題にしたマッカリによる壁画があったのだ。帰国後にそのことを知ってマッカリの作品に気付かなかったことに落胆した。しかし、よくよく考えると、これで再びシエナを訪れる楽しみが一つ増えたといえるのである。

* 石鍋真澄『聖母の都市シエナ』（吉川弘文館、1988年）169-70頁

淵上旭江筆《五畿七道図》の修復について

中村麻里子（主任学芸員）

淵上旭江《五畿七道図》寛政8（1796）年序

昨年から今年にかけて行われた、当館所蔵品である淵上旭江（1753-1816）筆《五畿七道図》の修復について述べる。《五畿七道図》は、東北から四国、九州に至る日本各地の名勝旧跡を描いたもので、「山陰奇勝」50図、「山陽奇勝」60図、「南海奇勝」56図、「西海奇勝」74図、「五畿奇勝」58図、「東海奇勝」62図、「東山奇勝」68図、「北陸奇勝」56図の計484図から成り、それぞれ天地2帖、全16帖にまとめられている。大坂で廻船問屋を営む富豪和田隆侯（1747-1803）の求めによって制作された大規模なものである。昨年は最も損傷の激しい上、我々にとって一番馴染みの深い「山陽奇勝」から修理に入った。続く今年は、「山陰奇勝」「南海奇勝」「西海奇勝」「五畿奇勝」「北陸奇勝」が修理完了、残すは「東海奇勝」「東山奇勝」の2シリーズのみとなった。

今回の修理の大きなポイントは、折本仕立てに改装したことである。本来は見開き2面しか展示できなかったが、改装したことで1帖につき30図前後にも及ぶ真景図が一度に見られるようになった。「山陽奇勝」だけでも天地2帖計60図を広げると、相当な見応えがある。各図は約13×20cmの小さな画面であるが、それぞれ細緻な筆致で濃厚な色彩が施されている。ふんだんに使用された緑青や群青が色鮮やかで、金泥線が使用された頁もある。

寛政11年（1799）から享和2年（1802）にかけて、合わせて8冊の『日本勝地山水奇観』が刊行され大ベストセラーとなるが、それはこの《五畿七道図》がベースとなっている。浮世絵師歌川広重(1797-1858)は『山水奇観』から抜き出した場面を自身の「六十余州名所図会」に引用していることは、よく指摘されている。《五畿七道図》「山陽奇勝」のうち『山水奇観』に採用されているのは22図、採用されていないのは37図である。逆に『山水奇観』にあって《五畿七道図》に無いのは3図であった（下表参照）。

近い将来、残る2シリーズ「東海奇勝」「東山奇勝」の修復が完了して全体が新しく揃うことになる。今後さらに《五畿七道図》と『山水奇観』との関連性の調査を深めていかなければと考えている。

＊《五畿七道図》「山陽奇勝」のうち『山水奇観』に採用されている22図

天　「1.播磨明石」「2.美作地蔵岩」「3.備前藤戸」
「4.備中酒津川」「5.備後阿武門」「6.安芸音戸瀬戸」
「12.備前高島」「17.18.播磨龍野」「23.備前児島瀧」
「24.播磨鳩峰」「25.26.備前龍ノ口」「28.備中妙見山」
地　「2.備前神代洞」「7.8.備後尾道」「11.周防室積」
「12.長門赤間関」「16.備後鞆津」「21.22.備中豪渓」

＊『山水奇観』に採用されていない35図

天　「7.周防錦帯橋」「8.長門壇ノ浦」「9.10.備前大崎」
「11.播磨書写山」「13-16.備前大新田」「19.備前日比浦」
「20.播磨石宝殿」「21.22.備前連島」「27.備前北浦」
「29.周防芦名村大戻」「30.備前吉井川」「31.周防大島瀬戸」
地　「1.播磨七曲」「3.4.備前牛窓」「5.備中牛島」「9.10.安芸宮島」
「13.14.備前常山」「15.小豆島穴観音」「17.18.備前松崎」
「19.小豆島坂手濱」「20.備前山坂嶺」「23.播磨伊保川」
「24.播磨坂越」「25.備前前島」「26.備前高島」「27.備前下津井」
「28. 小豆島池田瀧」「29. 小豆島坂手観音」

＊『山水奇観』にあって《五畿七道図》に無い3図

「播磨舞妓浜」「備中塩飽牛島」「周防祇園山」

展覧会スケジュール

3月 March

2月21日|金|ー4月6日|日|

【特別展】
藤田嗣治渡仏100周年記念
レオナール・フジタとパリ 1913-1931

藤田嗣治（レオナール・フジタ、1886-1968）は、東京美術学校を卒業後、1913年に渡仏し、「エコール・ド・パリ」の代表的な画家として活躍しました。裸婦に代表される「乳白色の肌」は、同地の画壇で評価されました。この展覧会では、これまで日本に紹介されなかった、フランスにおける個人所蔵の作品、ならびに日仏両国における美術館所蔵の作品などを通じて、独自の絵画が評価されるまでの道のりを紹介します。

各展覧会期間中、当館学芸員による
ギャラリートークや美術館講座など
随時開催予定。詳しくは当館HPまで。
http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/

4月 April

4月19日|土| 14:00〜15:30
記念講演会 「岸田吟香とは何者なのか
ーその肖像から辿るー」
講師 青木茂氏（美術評論家・明治美術学会会長）
会場 2階ホール(先着210名)

4月18日|金|ー5月25日|日|

【特別展】
岸田吟香・劉生・麗子展
知られざる精神の系譜

明治期に新聞記者や液体目薬「精錡水」の販売で活躍した岸田吟香を振り返るとともに、その四男で日本近代洋画史に大きな足跡を残した劉生、そして《麗子像》で知られる娘の麗子へ、その慧眼がどう引き継がれたかを辿ります。明治から昭和の激動の時代を駆け抜けた親子三代の物語をぜひお楽しみ下さい。

5月 May

4月25日|金| 18:00〜19:00
美術の夕べ 「岸田三代を巡る」
講師 髙嶋雄一郎 (当館学芸員)
会場 地下展示室　※要観覧券

4月22日|火|ー5月25日|日|

【岡山の美術展】
山﨑治雄の写真 第5回 旭川ダム

5月10日|土| 14:00〜15:30
記念講演会 「わが国におけるガラスびんの
黎明ー精錡水を中心に」
講師 庄司太一氏（びん博士・ボトルシキアター館長）
会場 地下講義室(先着70名)

6月 June

5月30日|金|ー7月13日|日|

【岡山の美術展】
生誕100年 岡本欣三の世界展

5月17日|土| 14:00〜15:30
美術館講座 「岸田吟香と劉生ー父と子と美術」
講師 鍵岡正謹（当館館長）
会場 地下講義室（先着70名）

6月6日|金|ー7月6日|日|

【特別展】
文化勲章受章記念 高木聖鶴展

書家の高木聖鶴は、平成25年11月県内在住者として初めて文化勲章を受章しました。優美さと鋭さを兼ね備えた独自の書風を打ち立て、現在の仮名作家で最高峰に位置しています。本展は高木聖鶴の、青年期の作品から近作までを網羅した集大成の展覧会で、書道界を牽引した氏の業績を顕彰します。